JCV ブータン王国視察報告書

2023 年 6 月 3 日～6 月 11 日

認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会

[催行概要]

目的　：　ご寄付がワクチンとして子どもたちに届いている現状を実際に見て支援国の国土、自然、生活、経済の状況をワクチン接種時事情の背景として情報蒐集し、理解すること。

期間　：　2023 年 6 月 3 日(土) ～ 6 月 11 日(日)

視察国　：　ブータン王国

訪問地　：　ティンプー（西部)、ブムタン（中央部)、モンガル（東部）

ＪＣＶ職員：　2 名　高橋 昌裕（ドナーケアグループ）
　　清水 大輔（募金開発グループ）

協力　：　UNICEF ブータン事務所、ブータン保健省
東武トップツアーズ（ＪＣＶスポンサー)、柴橋商会（ＪＣＶスポンサー）
ピーアークホールディングス（ＪＣＶスポンサー）

ホテルロビーで西澤先生と面会

【1 日目：2023 年 6 月 3 日（土）】

日本出発、経由地のバンコク・スワンナプーム国際空港到着

午後 5 時 25 分、成田空港発のタイ国際航空機に搭乗し、午後 10 時にタイ・バンコクのスワンナプーム国際空港に到着（フライト 6 時間 30 分）。空港内のホテルにて仮眠を取りながら、乗り換え便ドルック・エア（ロイヤルブータン航空）のチェックインを待つ。

【2 日目：2023 年 6 月 4 日（日）】

ブータン　パロ国際空港到着、首都ティンプー市へ移動

午前 3 時にドルック・エアのチェックインを済ませ、午前 5 時にスワンナプーム国際空港を出発。日本出発から約 17 時間を経た午前 7 時過ぎに、無事ブータン・パロ国際空港へ到着した。とても小規模ではあるものの、ブータン唯一の国際空港としてターミナルビルは拡張リニューアルされ、外国人観光客の本格的な来訪を期待する姿勢が伝わってきた。

空港にて、UNICEF ブータン事務所の広報担当ソナムさん、ドライバーのナムゲイさんが迎えてくれ、車で首都ティンプーに向けて 1 時間ほど移動。ブータンの国土はヒマラヤ山脈の麓に広がっており、移動のためには車で急カーブが続く峠道を辿ることになる。車道には崖から落ちてきた大きな石が転がっている場所や、落石にぶつかり放置された事故車も。早速、ブータンの道路事情を体感した。

西澤和子先生と面会

午後 2 時に医師の西澤和子先生とホテルにて面会。先生は、2011 年からブータンの国立病院で小児科医として活躍され、現在は現地の方と結婚もし、新たに設立された医科大学の准教授として、ブータンの新しい医師育成に励んでいる。医師の人数が増え、救急搬送にヘリコプターが使われ始めるなどの進展も見られるが、2010 年から JCV が行なっている「子どもワクチン支援」は、ヘルスインフラとして大事な活動であるとの言葉をいただいた。

夕方にティンプー市を一望できる高台や大仏、子どもたちの集まる公園や広場を巡った。公園や広場では、砂場や遊具で元気に遊ぶ子どもたちの日常の風景や笑顔を見ることができた。

UNICEF 事務所でのブリーフィングの様子

【3 日目：2023 年 6 月 5 日（月）】

首都ティンプー市内／UNICEF ブータン事務所訪問

視察行程の開始。まずは、UNICEF ブータン事務所を訪問し、支援の状況やワクチン接種状況について確認を行った。事務所代表のアンドレアさん、ワクチン担当のチャンドラさんらスタッフの方々に出迎えられ、今回の視察に関してブリーフィングとレクチャーを受けた。アンドレアさんからは、2010 年からの長年の支援への感謝と、これからもブータンの子どもたちのために一緒に活動を続けていきたいとの言葉をいただいた。

「JCV は毎年欠かさず支援をしてくださるため、しっかりと接種計画を立てることができ、とても助かっている。」というチャンドラさんの言葉通り、ブータンでは、JCV のワクチンと関連機器（ワクチン保冷庫や注射器など）の支援により、全国くまなく確実にワクチンを子どもたちに届けられており、高いワクチン接種率が維持されていることが確認できた。定住しない遊牧民の子どもたちへの接種など、まだ課題も残されている一方で、国の発展に伴い国際的な支援の縮小が予定されており、これまで築き上げた仕組みを維持するための政府へのプレッシャーが大きくなっているとのこと。

その後、ブータン保健省にて公衆衛生部門のカルマ・ジャムツォー局長と面会。新型コロナワクチン接種の際に、国際支援によりワクチン保冷庫の入れ替えが進み、全体の 95%は WHO の基準を満たしたワクチン保冷庫を使用できているとのこと。また、全国の保冷庫の温度のリアルタイム監視システムが稼働し、JCV の支援で贈ったワクチンがしっかりと子どもたちに届けられるよう、管理されていることが確認できた。また、険しい山岳地帯に小さな集落が点在するブータンでは、ワクチンを無駄にしないよう、学期期間中に合わせた接種や、1 瓶あたりの容量が小さいワクチンを購入するなど、しっかりと対策を講じてワクチン接種を実施している。

保健省で公衆衛生部門のカルマ・ジャムツォー局長と面会

中央ワクチン保冷庫にて国家 EPI 技術者セリング・ワンチュクさんの説明を受ける

保冷庫には UNICEF などのロゴと一緒に JCV のロゴステッカーも貼られている

保冷庫に保管されている JCV が支援したワクチン

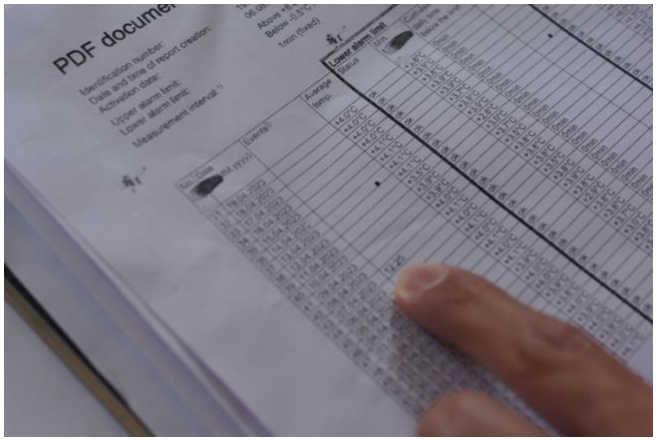
EPI 中央保冷庫

次に、中央ワクチン保冷庫にて国家 EPI（予防接種拡大計画）技術者のセリング・ワンチュクさんと面会。日本の皆さまの支援で贈られたワクチンを、ブータン全土に届ける拠点基地。国外から搬送されてきた各種ワクチンが、いったん、すべてこの中央保冷庫に保管される。厳格に低温管理されたワクチンは、ブータン国内 3 カ所にある地方保冷庫を経由して、各地の拠点病院、さらに小規模のヘルスセンターや診療所に届けられる。

中央保冷庫にはワクチンは半年に 1 回補充しており、次回は 7 月に補充される予定ということで、訪問時にはウォークイン保冷庫の棚の中はほぼ空になっていた。使用期限のあるワクチンを過剰に在庫することなく、計画的に各地域の保冷庫に届けている状況を確認できた。

ワンデュポダン

午後 12 時に病院を出発し、ティンプー市の国連機関が入る UN ハウスにて昼食。その後、ワンデュポダンに移動。途中、標高約 3,150m のドチュラ峠を車で超えた。この日の宿泊は、道路からは平屋に見えたホテル。ところが、いざ中に入ると、道路から入ったのは 5 階部分で、食堂や客室はその下についているという造りだった。



温度管理の記録

子どものワクチン接種に訪れていたお母さんへインタビューの様子

【4 日目：2023 年 6 月 5 日（火）】

ワンデュ病院

朝 9 時、病院に到着した一行は EPI（予防接種拡大計画課）責任者のチャドル・ペルモさんに迎えていただいた。2019 年 7 月に拡張移転されたという病院で、この地域にある 22 の医療施設とともに住民への医療サービスを提供している。ワクチンは 2 台の冷凍庫、3 台のワクチン保冷庫にて種類別に管理され、毎日接種数と開けたワクチンの瓶の数を、手書き台帳とシステムに記入し管理している。温度も自動で監視システムに送信されているが、ブータン政府の方針に従って 1 日 2 回、手書きでも記録をつけている。ワクチンはしっかりと管理され、在庫が不足することもなく、接種が必要なタイミングで欠かすことなく子どもにワクチンを接種できる体制が整っていた。

赤ちゃんの定期検診とワクチン接種に訪れていた 2 人の母親からお話しを聞くことができた。 2 人とも、ワクチン接種が子どもの感染症予防に役立つことを理解し、自身の子どもたちがワクチンを接種できることについて、JCV を通じた日本の支援者の皆さまに感謝の言葉をいただいた。また、主席医務官を務めるサンゲイ・ドルジ先生とも面会。病院でのワクチン接種は、コロナ禍でも対策をとりながらしっかりと継続し、約 60 日にわたるロックダウンの最中には、接種が必要なタイミングで子どもの家を訪問してワクチン接種を継続していたという。必要なタイミングでワクチンを届け、子どもたちを感染症から守るため最大限の努力を積み重ねていた。

一番の課題は人材不足。今、ブータンでは看護師や医師の資格を持った人が、より良い待遇を求めてオーストラリア、カナダ、イギリスなどに移住するケースが増えているという。今は看護師が 2 人しか残っておらず、7 月に新しい看護師が着任する予定になっているが、まだ何人来るか分からず、しっかりと医療を継続できるか心配していた。

午後 12 時に病院の訪問を終え、約 200km 離れたブムタンへ移動。いくつも山を越えることになるが、途中冬のような寒さの中、ブータンの寒冷地域に住む「ヤク」の集団に遭遇する場面も。標高によって温度が目まぐるしく変化するブータンならではの体験となった。カーブの続く片側 1 車線の山道で大型トラックやトラクターを追い越し、時にガタガタの未舗装路を走破し、午後 6 時、ブムタンに到着。

標高 3,000m のブムタンで、今が一番暑い季節ということだったが、それでも朝晩はとても冷え込んでいた。寒冷な気候で知られるブムタンでは、これまでのソバ栽培に加えて、北欧の協力を得て乳製品をはじめ新しい産業の開発を進めているということだった。

ウラ・ヘルスセンター入口の看板

保健助手のチミ・ドルジさんからワクチン接種履歴システムの説明を受ける

保冷庫の温度や管理されているワクチンを確認

4 人の孫をもつおばあちゃんにインタビュー

【5 日目：2023 年 6 月 7 日（水）】

ウラ・ヘルスセンター訪問

朝 8 時にブムタンを出発。町を離れてすぐ、車は細い山道に入り、時折遭遇する 4～5 頭の牛の集団を避けながら山をいくつも越え、2 時間かけてウラ・ヘルスセンターに到着。母子保健部門の担当保健助手チミ・ドルジさんが迎えてくれた。このヘルスセンターでは、6 人の保健助手が約 1,000 人の住民の医療やワクチン接種を担当している。ワクチン接種は毎月 13 日に実施しており、60 人ほどいる 5 歳未満の子どもは全員、必要なワクチンの接種ができている。子どものワクチン接種履歴は、全国のシステムで管理されており、システムも確認しながら、接種予定日を逃してしまった子どもの親に個別連絡を取るなど、きめ細やかに対応していた。

「子育て中の親が病院に来たときには、少し時間をとってワクチン接種やバランスの取れた食生活などの指導も行っていて、最近では親も子どもたちの健康にこれまで以上に気をつけるようになっている。今の子どもたちは国際支援のおかげでワクチン接種を受ける機会があり、健康に育つことができるようになってきている。これからも地域の皆の健康のために尽くしていきたい」とチミさん。

ヘルスセンターに設置されているワクチン保冷庫も確認。保冷庫は室温が 15 度以上の環境を前提に設計されているが、この病院では 15 度を下回ってしまうことも多いとのこと。保冷庫が設置されている部屋のヒーターが動いていたので不思議に思ったが、保冷庫をしっかりと動かし、子どもたちにワクチンを届けるための工夫の一つだった。この病院では年に 1 回程度停電することがあるが、ヒーターが動いていないと冬にはワクチンが凍ってしまう可能性もあるという。そういったときは、チミさんがワクチンをコールドボックスに入れて家に持ち帰って、温度管理を行っているという。JCV の支援者の皆さまの支援で贈られたワクチン一つひとつを大切に扱っていただいていた。

5 歳児の教室の先生と子どもたち

学校でのワクチン接種などについて説明してくれる養護の先生

モンガルへ続く険しい道と滝

この病院では、4 人の孫をもつおばあちゃんから話を伺った。孫のワクチン接種スケジュールも覚えているほどに孫を大切に思い、またワクチンの役割を理解していた。彼女が小さな頃は、感染症にかかる人々もいたが、ワクチン接種が広がったおかげで、今では昔のような感染症は見かけなくなったという。

その後、車で数分の距離にある学校を訪問。5 歳から 18 歳の子どもたち 344 名が通学している学校で、ウラ・ヘルスセンターのチミさんが学校医として、養護の先生とともに子どもたちにワクチン接種や健康診断、ビタミン投与などを行っている。子どもたちが必要なタイミングで、学期期間中にワクチン接種を受けられるよう、チミさんが学校としっかり連携して予定を立てることで、学校の子どもたちの健康は守られていた。

5 歳児の教室には、子どもたちが 20 人ほど。私たちが入るなり、「Head, Shoulders, Knees & Toes」を英語とブータンのゾンカ語で歌って踊って歓迎してくれた。将来の夢を聞いたところ、医師、学校の先生、軍人や警察官、芸術家などなど。夢に向かって勉強に励んでいる様子が見てとれた。

午後 1 時過ぎに学校を出発し、約 140km 離れたブータン東部のモンガルへ移動。道はしっかりと舗装されているが、山を切り崩したばかりなのか、車から見上げると根が剥き出しになっている木が崖の上に。路肩には 2m 四方はある岩や、半分に折れた木なども転がっており、落石などの対策が追いついていない様子だった。途中、数十 m 上から道路脇へと降り注ぐ一筋の滝にも遭遇。

ブータン西部から中央部への移動に比べると、道路未舗装の区間が多くなってきた。牛はほとんど見かけなくなったが、東部に進むに従って暖かく湿った空気の中、ヤシのような葉の広い木やシダ植物が多くなり、セミのような虫の声も増えてきた。トウモロコシの段々畑やバナナの木が植えられた集落を通り、夜 7 時半にモンガルのホテルに到着。部屋にエアコンはなく、扇風機があるのみ。窓には網戸がないので、開け放つこともできず、ブムタンとの気候の違いを実感した。

ワクチン接種に病院を訪れていた母子

ワクチンを接種する保健助手のリンデン・ドルジさん

【6 日目：2023 年 6 月 8 日（木）】

モンガル病院

朝 9 時に、ブータン東部最大の都市モンガルの拠点病院を訪問。150 床、450 人のスタッフが働く規模の大きな病院で、東部地域のワクチン保冷施設も兼ねている。2016 年の JCV の支援により大型のウォークイン保冷庫が設置され、ブータン東部の子どもたちにワクチンを届けるための拠点となっている。

医療局長のペルデン・ワンチュク先生に面会。「この病院では約 8,000 人の住民を対象に医療を提供している。対象区域外の妊婦もこの病院で出産することが多いため、出生直後に接種する BCG や B 型肝炎ワクチンの接種率は 100%を超えている。その他のワクチンは、みな地元に戻って近隣のヘルスセンターで接種するため、モンガル病院の接種率が 100%を超えることはないが、それでも 95%前後と高い基準で推移している。数年前に、はしかに感染した患者が見つかったが、高いワクチン接種率のおかげで広がることはなく、それ以降は発生していない。子どもたちの命を守るために重要なワクチンの支援を贈っていただいて、とても感謝している」との言葉をいただいた。

この病院では、ワクチン接種は毎日行われているが、今日は週に 1 度の母子医療の日で、多くの親子が訪れていた。医療の人手不足が発生しているか質問したところ、ここでは起きていないとの回答だった。訪問中に、2 人の母親に話を聞いたが、ワクチン接種の重要性を理解し、JCV の支援者の皆さまにとても感謝していた。

保健助手のリンデン・ドルジさんは、病院での接種の他に、週に 1 度、病院から車で 1 時間半ほどかかる村を 5〜6 カ所訪問し、毎回 15 人ほどの訪問ワクチン接種も担当している。「仕事を始めた 2010 年には、道路が整備されていなかったため、訪問ワクチン接種のために村まで 8 時間歩いて、電気のないヘルスセンターで一晩過ごすこともあったが、ワクチン接種により子どもたちの将来を守り、未来を作っていることに誇りを感じている。読み書きのできない親もいるが、医療スタッフの説明を聞いてワクチンの重要性を理解し、次のワクチン接種日を聞かれることもある」と嬉しそうに語ってくれた。

2016 年に支援したウォークイン保冷庫

保冷庫を移設した際に JCV の支援で修理した天井

JCV が支援したワクチンは保冷庫でしっかり温度管理されていた

移動する車には JCV のロゴも

東部ワクチン保冷庫を訪問

モンガル病院の最上階に設置されている、東部ワクチン保冷庫を訪問。2011 年に訪問した際には、病院の地下に小型の保冷庫が数台設置されていたが、東部の拠点保冷庫として設備を拡充するために最上階に移され、2016 年の JCV の支援で贈られた大型のウォークイン保冷庫が設置されている。管理者チェリング・ワンディさんは「JCV の支援によるウォークイン保冷庫が設置される前は、東部地域には小型の保冷庫しかなく、ヘルスセンターで 20 年以上使っている古いものもあった。今は全体の 95%の保冷庫の入れ替えが進み、しっかりと温度管理され、効力のあるワクチンを子どもたちに届けられるようになった」という。支援を継続することで、ブータンで最も開発が遅れていると言われる東部地域でも、子どもたちへワクチンを贈るための環境整備も着実に進んでいることが確認できた。

ブータン国内で 1 本しかない、東西をつなぐ道路を辿った今回の視察もいよいよ折り返し。JCV の支援で贈られたワクチンも同じ道を辿って運ばれていると聞き、感慨深い印象を受けたが、余韻に浸る間もなく、2 日半かけて来た道をこれから 1 日半で首都ティンプーへ戻らなければならない。40°C近い気温になったモンガルを午後 13 時に出発。ブムタンに着く頃には、すでに真っ暗になっていたが、時間を問わず散歩している牛の集団を避けつつ峠道を走破し、夜 8 時前にホテルへ到着。

ティンプーへ移動中に雨の中でも存在感を示すトンサ・ゾン

夕食会の様子

夕食会の様子

【7 日目：2023 年 6 月 9 日（金）】

ティンプーへ移動

雨がぱらつく中、朝 8 時にブムタンを出発し、約 260km 離れたティンプーへと車で移動。雨は徐々に本降りになり、山の中では雲に包まれ、先が見通せないところも。休憩や食事を挟みつつ、3,000m 級の峠を 3 つ越えて夕方 5 時にティンプーに到着。市内では学校が終わったタイミングで、たくさんの子どもたちが学校から帰路についていた。ブータンには信号がないため、学校近くの横断歩道では警察官が交通整理し、子どもたちを守っていた。

夕食会

UNICEF ブータンの副代表や、保健省の局長、西澤先生をはじめ 12 名が参加し、視察の締めくくりに夕食会を開いていただいた。ブータンの文化ミュージアム内のレストランで、伝統的なブータン料理を食べながら、視察で出会った医療スタッフの努力や、医療スタッフや政府への国民の厚い信頼を直接見ることができたお礼をお伝えした。

JCV の訪問は、UNICEF ブータンにとって、コロナ後で初めての視察受け入れだったということで、手厚く歓待いただいた。来年は UNICEF ブータンが 50 周年を迎えるため、JCV の創設 30 周年と併せて、また来てほしいとのメッセージも。

僧院について説明をしてくれたキンレーさん

僧院で最年少の 5〜6 歳の子どもたち（前列）

僧院の子どもたちと記念撮影

パロ空港まで見送ってくれた UNICEF のスタッフ

【8 日目：2023 年 6 月 10 日（土）】

僧院の子どもたちを訪問

ティンプー近隣で、子どもたちに会える場所を訪問できないか、と視察当初から相談していたところ、最終日に僧院訪問を調整いただき、訪問が叶った。この僧院では 5 歳から 20 歳の約 300 人が住み込みで修行をしており、ワクチン接種も含めた保健指導は保健コーディネーターの研修を受けた僧院スタッフ 2 名が担当しているという。

貧しく、学校に通うことができない家庭の子どもたちが、家族や知人に勧められて修行僧となることが多いと聞き、仏教が社会の受け皿となっている一面を垣間見た。最後に、庭に集まってくれた修行 1 年目の皆と挨拶。5 歳から 18 歳までと年齢層が幅広く集まっていたので不思議に思っていたが、年齢に関係なく、1 年目は全員同じクラスで指導を受けているという。歓迎のお礼を伝え、ティンプーを後にした。

【9 日目：2023 年 6 月 11 日（日）】

ブータン・パロ発、バンコク経由で帰国

すべての行程を終え、6 月 10 日（土）午後に UNICEF の見送りを受けてパロ空港を出発し、バンコクでトランジットの後、6 月 11 日（日）午前 7 時前、無事、東京の羽田空港に帰国。滞在中は、現地スタッフの献身的なサポートのおかげで、ブータンを東西に移動しながら、実情を様々な角度から体験、実感し、医療スタッフの努力も間近で確認することができました。

[JCV のブータン支援]

ヒマラヤ山脈の南麓で、インドと中国という大国にはさまれたブータンは、九州とほぼ同じ国土面積ですが、標高差が激しく、氷河に覆われた山岳部のツンドラ気候からインドと接する平野部の亜熱帯気候まで、変化に富んだ自然環境をもっています。ブータンの EPI（拡大予防接種計画）は 1979 年に始まり、現在では概ね 90％以上のワクチン接種率を維持しています。2008 年から JCV が支援を開始し、2014 年 3 月にはポリオフリーが宣言されました。同国の所得は増えていますが、自国ですべてのワクチンをまかなう体力はまだありません。新しいワクチンの導入などからコールドチェーン機材へのニーズも高まっています。また、定住していない遊牧民への接種や、寒冷な気候でワクチンを凍結から守るための停電への対策など、課題もあります。引き続きワクチンとコールドチェーン機材支援を行い、同国のワクチン接種環境が改善されるよう見守ります。

[ブータンの基礎情報]

面積：
約 3.8 万平方キロメートル（日本の九州とほぼ同じ）

人口：
約 78 万人（2021 年、世銀資料）

首都：
ティンプー

民族：
チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等

言語：
ゾンカ語（公用語）等

宗教：
チベット系仏教、ヒンドゥー教等

世界の子どもにワクチンを
日本委員会

JCV

Japan Committee
Vaccines for
the World's Children